

さわやかな五月の青空が回復したさる土曜日の朝、品川駅中央改札口のみどりの窓口前に集合した在京飯田出身者の有志三十二名が小旗を先頭に歩きはじめた。

まず最初の目標は泉岳寺。このグループ「東京の飯田を歩こう会」のメンバーで、昨年春に発足。今回は第三回目となった。鉄道唱歌なら汽笛一声、新橋から出発してすぐ、右は高輪泉岳寺／四十七士の墓どころ。

だが、この一行は品川駅発だから左手に泉岳寺の山門が見えてくる。

先頭をゆく小旗は緑と白のストライプス、飯高フタバ班の応援旗。行列の顔ぶれは年齢ばらばらで男女混



飯田藩主の菩提寺・東江寺前で全員写真 (榊原さん提供)

合、あまつさへ手押しベビーカーに一歳半とかの坊やを連れた夫婦もいるという珍妙な行列。ついでに紹介するなら、この子連れ夫妻は伊賀良出身の榊原雅直さん。第一歩こう会からの常連で今回は初の子連れ参加となった。佐々木康夫さんも杖を片手に加わった。泉岳寺と飯田のゆかりは毎回説明役の不肖牧内が講談調で物語る。四十七士墓域に通ずる階段道の奉納玉垣に信州伊那谷、高森町牛牧義士踊り保存会が目にとまり、さらに同じく阿智村中関義士踊り保存会の名を刻んだ

玉垣もある。芸能好きな信州伊那人の面目躍如、ここ泉岳寺から招請されて奉納公演を行うなど縁故が深いのだった。

もうひとつはご存知「赤垣源藏徳利の別れ」で名高いこの人物、出生地が飯田市本町四丁目ということで小説家海音寺潮五郎のお墨付き碑文が建立されている。さらに飯田市観光協会も「赤垣源藏誕生地」の説明板を知久町に建てているのだからもはや動かぬ事実になったかと思える。

四十七士の講談には本伝、銘々伝、外伝とおびただしい数の物語がある。これぞ日本人のロマンと受け入れるべしで事実の詮索などは野暮なことだ。

### 『東京の飯田』をウォーキング

泉岳寺から東江寺へ

牧内 雪彦

線香の煙を後にして山門を出ると、高輪台上の緑陰濃い一角を指す。大石内蔵助ら十七名が預けられ切腹した細川家下屋敷跡だ。ひととき大きい銀杏の樹下に誰が供えるのか門前に献花台があり、「大石自刃の碑」が立っているけれど切絵図に

れに反論しガリガリの儒教論法を押し通したのが荻生徂徠と飯田高校歌でおなじみの太宰春台なのだから困ってしまう。

魚籃坂(ぎよらんざか)を下って南麻布古川橋へ。ビルに埋もれているけれど切絵図に

五五散らばり一時半集合を約束して昼食をとる。

午後のウォーキングは一直線に端泉山祥雲寺へ向かう。臨済宗大徳寺派の名利である。寺院の貴様堂々たる広い区画の中、昔は祥雲寺の塔頭だったらしい東江寺ほか四つの寺院が奥床しいたはずまで並んでいる。

飯田堀公の菩提寺、妙高山東江寺の山門に入ろうとした時、明らかに当寺の住職らしき人物とぼったり出会った。

は堀石見守と明記されている。およそ二千坪余と思われる下屋敷跡。何の標示もないかた十名ずつ三十名も同時刻に自刃を果しており、その夜のうちに泉岳寺へ葬られたという。記念撮影する。仙台坂をのほり有栖川宮記念公園(元南部藩邸跡)にて小休止し、広尾商店街で三三

さり一時間近い説明も頂いたのだから幸運が過ぎるとさえ思われた。

住職の氏名がこれこそ偶然にも飯田義道という。一昨年だったか、飯田美博の大きな企画展「堀公展」では東江寺からの出品その他で飯田住職の協力が大きかった。本堂



堀家代々の墓域は縮小したが苔むした墓誌が残る (大原さん提供)

景に飯田住職を囲んで記念撮影する。

打ち上げ会場はえびすガーデンプレス。すでに下見のとき幹事役の下島明、大原直、北沢幸夫三氏が予約してあった。ここはサップロビール王国で、北沢幸夫さんの顔が利くのだった。

いつも丹念な下調べで資料を用意してくれる下島さん、大原さんの挨拶に続いて乾杯の音頭を長老の筆者、そして談論風発、歓談の二時間をすこし、閉会の挨拶と閉めを金田明夫さんがされて次回を楽しみに散会した。

【講談作家、ジャーナリスト】埼玉県川口市、飯田市川路天龍峡出身】